新しい建築類型としてのポピュラーカルチャーミュージアム

マンガの展示はいかにして可能か

A POPULAR CULTURE MUSEUM AS A NEW BUILDING TYPE

How can we exhibit manga/comics?

谷川 竜一*

Ryuichi TANIGAWA

Recently the number of museum for manga culture has been increasing in Japan. When manga is regarded only as visual culture, and is exhibited, the building type of museum can be useful space to show pictures of manga. But manga is also linier media people read individually, like books in a library. In this situation, Kyoto International Manga Museum may be regarded as one of the “successful” manga museum in Japan, because this architecture has both spatial aspects of museum and library. In this paper, it will be discussed what is the museum building adopted to manga, comparing 3 museums or libraries for manga culture - Kyoto International Manga Museum, The Osamu Tezuka Manga Museum, and Hiroshima City Manga Library.

Keywords : Manga, Comics, Museum Architecture, Renovation of Closed Schools

マンガ, 博物館建築, 廃校再生

1. マンガ文化を入れる器としての建築

近年、マンガを日本のソフトパワーの源泉とみなし、文化政策の一環として積極的に育成する動きがある。その一つとして、まちづくりの起爆剤として日本全国に様々なマンガ博物館が計画・建設されている¹⁾。そうした博物館では、マンガの原画や作者に関する情報が「見る」価値のあるものとして展示されることが一般的である。また、マンガが叙述された物語を個々人で「読む」メディアであることから、マンガを書籍として扱い、博物館ではなくマンガ図書館として設立する動きもある²⁾。さらには、「見る」かつ「読む」メディアとしてのマンガの特性を活かし、博物館と図書館の融合型としてのマンガ博物館も登場している。

こうした社会状況の中で、マンガ文化や経済的効果の議論はなされても、マンガの展示・収蔵・閲覧などを目的とした建築としてのマンガ文化施設はほとんど注目されていない。そもそもマンガは、私たちの日常生活の中で発展してきた出自をもつ。そうしたポピュラーカルチャーであるマンガ文化のための建築として、ハイカルチャーのために発展してきた博物館建築を用いることは可能なのだろうか。本論ではこうした問題意識を背景にして、マンガの特性を排除せず、マンガを包括的に展示する施設を造り出すために、着目すべき指標を抽出することを目的としている。そのために、数多くあるマンガ文化施設の中から、上記のように博物館という建築類型で

マンガに対応した施設として宝塚市立手塚治虫記念館を、図書館という建築類型で対応した施設として広島市まんが図書館を、さらにその融合型として登場した京都国際マンガミュージアム（以下MM）を取り上げる³⁾。各館の基礎情報は表1の通りである。

2. 研究・調査の方法—トラッキング調査と建築空間分析

マンガ文化施設は比較的新しい施設であり、筆者を含めた研究グループの一連の研究以外でまとめたものは、管見の限り見当たらない⁴⁾。筆者らは、先のようにマンガの特性に対応した建築空間を議論するために、研究手法として来館者行動と建築分析に適したトラッキング調査を行なった。トラッキング調査とは、1930年代に心理学者たちが始め、日本では石田らにより1960年代に導入され始めた手法で、施設内で来館者がたどった経路を調査員が追跡しながら、動線として記録する追跡調査である⁵⁾。来館者が滞留した場所や、そこで行った行為も記録するため、館内の来館者行動の把握には最適な方法であり、来館者へのインタビューやアンケートでは捉えられない包括的な行動経過を記録できる手法である。

トラッキング調査は、展示をよりよく理解してもらうことを目的とした博物館学的調査であったが、それを建築学の分析に用いた先駆的な日本の事例としては、坪山らによる水族館の展示水槽に対する来館者の観覧行動分析がある⁶⁾。また近年の研究に目を向けると、博物館内の行動分析に関して江水らの民家の室内展示の観覧行動分析があり、図書館内の行動分析に関しては北岡らの調査がある。

坪山らの研究では、来館者に対して水族館内の展示のもつ「誘引力」や「魅力度」を、来館者の立ち止まりやその観覧時間に対応させ、数値化して分析している。上述した他の既往研究でも、滞留時間が

表1 各館概要

	宝塚市手塚治虫記念館	広島市まんが図書館	京都国際マンガミュージアム
建築類型	博物館建築	図書館建築	小学校建築リノベーション
竣工年	1994年	1997年リノベーション (元青空図書館1983年)	2006年リノベーション (元隆池小本館1929年、北館1937)
延べ床面積	1395㎡	656㎡	5013㎡
ここ5年間の来館者数	10万人前後/年で推移	24万人前後/年で推移	20万人前後/年で推移
開館時間	9時30分～17時	10時～17時	10時～18時
入館料	有料	無料	有料

* 京都大学地域研究統合情報センター 助教・工博

Assistant Prof., CIAS, Kyoto University, Dr. Eng.

分析の指標として用いられている。しかし本調査では、来館者がいかなる目的をもって、身近なポピュラーカルチャーであるマンガをおさめた施設に来館するののかという点から考察することを目指していた。加えてマンガは見るだけでなく、読むという行為を伴うため、滞留時間を指標とすると、観覧行為中の質的な差異が失われる恐れがあった。こうした理由から、観覧時間の多寡よりも、来館者の行為や会話の内容の観察を重視し、上述した先行研究の手法を踏まえながら次に示す独自の調整を加えた。

まず、来館者 1 人に対して大学生の調査員 2 人 1 組の交代制で対応し、3 組のチームを作ってトラッキングによる来館者の動線データを収集する。MM 以外の来館者にはトラッキングしている旨を伝え、個人を特定できない範囲での情報収集に関する了解を得た。またトラッキング中に MM も含め来館者が少しでも問題と感じた場合は、説明した上でデータを破棄した。なお調査者は、十分な距離を保ち来館者の行動に影響を与えないようつとめた。こうして得た図面に書き込んだ動線のデータには、来館者のその場での行動や会話の内容をメモ書きで書き添える。そして 1 つのトラッキングを終えると調査員を筆者の前に呼び、必ず来館者の動線を確認しながら、被験者の展示に対する観覧の様子や集中の軽重を、逐一インタビューをして記録した。その際調査員から見て、被験者の来館目的が何であったと評価できるかもヒアリングした。こうした方法により、動線と動線に補足されたメモ書きに加え、来館者の一連の細かな行動記録や来館者の来館目的の評価を文字で記録した。

次に、マンガの「見る」「読む」というメディア特性に応じて想定されうる観覧行動として、次の二つの行動類型を仮定し、基本とする分類基準を設けた。

M 型 (Museum: 博物館型行動) : 展示や体験学習型コーナーなど

調査者に対するインタビューシート

宝塚・広島 (○をつける)

シフト 2011 年 9 月 1 日
(9:30~11:30, 11:30~13:30, 13:30~15:30, 15:30~17:30 ←○をつける)

データ No. (12BM-2)

調査者 (田中 伊藤)

インタビュー記録者 (山中、村田、谷川、伊藤) ←○をつける

① あなたがトラッキングした調査対象者の観覧方法の特徴を教えてください。
(3 行以内)

10 時 40 分くらいに入ってきた。カップルで来た男性の人を調査。20 代後半 (彼女がもう少し若く見えた)

じっくり。カプセルの前の解説をじっくり二人で見た。記念スタンプを押していた。カプセルを一つ一つ見て行った。壁側のカプセルをみていくかんじ。4 つめ、5 つめ (手塚の作文、魚の絵をじっくり)。向かい側のカプセルをジグザグに見ていった。

最初は彼女の方に着いていく感じだったが、途中で別々に分かれた。カプセルの真ん中

図 1 調査員に対するインタビュー例

表 2 各館の調査結果概要

調査期間	宝塚市手塚治虫記念館	広島市まんが図書館	京都国際マンガミュージアム
実施トラッキングデータ	2011 年 9 月 1 日 (木) - 9 月 5 日 (月) 10 月 14 日 (金)	2011 年 9 月 7 日 (水) - 11 日 (日)	2009 年 11 月 14 日 (土) - 22 日 (日)
被験者性別 (男/女) (件)	53 件	71 件 (うちロスト 1 件※)	68 件 (うちロスト 7 件※)
被験者年齢 (小学生以下/20 代未満/20-30 代/40-50 代/60 代以上) (件)	25/28	41/30	33/35
被験者国籍 (日本/海外) (件)	3/5/28/13/4	9/3/24/27/8	12/6/28/15/7
被験者国籍 (日本/海外) (件)	48/5 (外国人のみの来館は 4 件)	71/0	59/9
平均滞在時間 (ロスト物件は抜く)	1 時間 15 分	49 分	1 時間 53 分
調査方法	来館時入り口で調査内容を説明し、承諾を得た後に、気配を感じさせない程度に後ろからトラッキング。サンプリングは基本的にしない。	来館時入り口で調査内容を説明し、承諾を得た後に、気配を感じさせない程度に後ろからトラッキング。サンプリングは基本的にしない。	調査内容の説明はせず、気づかれないようトラッキングを行った。後に人物特定できるようなプライバシーに関するデータは採取しない。サンプリングは基本的にしない。

※ ロスト物件とは、調査者がトラッキング中に発見できなかった物件を指す。

を中心に観覧するタイプ

L 型 (Library: 図書館型行動) : マンガ読書ないしアーカイブ化されたアニメ視聴を中心に観覧するタイプ

この基準に従って、作成した各館のトラッキングの動線データ、来館者の観覧行動に対する調査員のインタビューや評価情報を参照しながら、来館者の行動を分析することとした。

このように、本調査では先行研究で用いられているトラッキング調査方法を調整し、動線とそこにおける来館者の行為やその意味を二重三重に確認しながら記録する、質的調査方法としての特徴を強化した。各調査の日程や結果の概略は表 2 の通りであり、M 型、L 型の具体的な行動分類と内容については、後に論じる。

3. 博物館という建築類型—宝塚市立手塚治虫記念館

3.1 概要

1989 年の漫画家・手塚治虫の死後、彼が 20 年間過ごした宝塚市に、宝塚市立手塚治虫記念館が設立された。同館のコンセプトは「手塚治虫が唱え続けてきた「自然への愛」「生命への尊さ」をテーマに、青少年の夢と希望を未来へ広げていく施設」であり⁷⁾、設計を山下設計が担当し、宝塚ファミリーランドの隣に 1994 年にオープンした。年間の来館者は現在 10 万人前後で推移している。

建物は鉄筋コンクリート (以下 RC) 造 3 階建てで、1 階が手塚治虫に関する常設展と上映施設「アトムビジョン」、2 階に企画展示室、手塚マンガが読める「手塚治虫ライブラリー」、手塚アニメやゲームを楽しむ「情報・アニメ検索機」、ミュージアムショップ、カフェなどがある。地下 1 階にはアニメやイラスト制作の体験ができる「アニメ工房」で、東側に事務・管理室がある。

館内は展示・体験スペースを中心とした構成であり、建築類型としては博物館建築である。

3.2 トラッキング調査の結果

手塚治虫記念館の 53 件のデータを、第 2 章の分類基準に照合した結果、表 3 の結果となった。調査員のインタビュー内で、来館者が「作品を細かく見ていた」り、来館者同士で「これが描けるのはすごいな」などの批評を行ないながら展示空間を一通り巡っていたと記録されているものは、典型的な M 型とみなした。また L 型は、展示を見ずに、例えば滞在中の行動の大部分をアニメ『ブラックジャック』の視聴や、マンガ『ブッダ』などの読書に費やしていたものを典型的なものと思見した⁸⁾。その結果、M 型が 52 件、L 型が 1 件となった。

次にフロア移動に着目すると、1 階の常設展やアトムビジョンを見た後、1 階東側の階段で 2 階に上がり、企画展を鑑賞し、ショップや情報・アニメ検索機に立ち寄って、地下 1 (B1) 階に降りる動線が 53 件中 33 件を占めた。また上の行動類型基準と照合したところ、それらは全て M 型の来館者行動となった (以下「12BM 型」とする)。過半数がこの順路を通り、M 型行動を示したことから、12BM 型は、同館の典型的な垂直方向動線と判断できる (表 4)。

表 3 手塚治虫記念館 調査結果

行動類型	件数	平均滞在時間	概要
M 型	52	1 時間 14 分	・1 枚 1 枚じっくり鑑賞。 ・絵に対する批評を後と話ししていた。 ・1 冊目を 30 分かけて (中略)、10 分ほどブッダを鑑んだ。 ・アトム像で 5 人で記念撮影。
L 型	1	1 時間 25 分	
合計	53	1 時間 15 分	

表 4 12BM 型の件数

	12BM 型 (件)	12BM 型以外 (件)	合計 (件)
子供を含む	2	5	7
子供を含まない	31	15	46
合計	33	20	53

3.3 M型行動と建築空間との関係分析

次にトラッキングの結果を、建築空間との関係で考察する。手塚治虫記念館の北側敷地は、同館南側より約3m低く、池もある湿地で、木々が生い茂っているため、館の北側は湿気も多く日当たりも悪い。東側は住宅地で、ここに面して館は職員通路や資材搬入路といった裏動線を設けている。一方館の西側は、JR・阪急の宝塚駅側から宝塚大劇場に向かう「花のみち」の延長線上にあり、南側は阪急・宝塚南口駅からのびる県道16号線が館に面している（図2）。これらから、記念館の空間は西側と南側ほど利用価値が高く、東側と北側ほど閉鎖的で、管理・運営空間に向くと考えられる⁹⁾。

一方、展示内容の順路から、同館の巡回形式は、1階常設展（アトムビジョンでの手塚アニメ視聴も含む）→2階企画展→2階ショップ→2手塚治虫ライブラリー・情報・アニメ検索機→2階カフェ→B1階アニメ工房であるとわかる。手塚治虫の生い立ちに始まり、手塚の業績を辿った上で企画展に向かうこの順路は、同館が単なる手塚マンガの記念館ではなく、同館のある宝塚で育った手塚治虫個人を知ってもらうための経路であると考えられる。この巡回形式に

応じて、1、2階部分のアプローチが良く明るい西側に展示スペース、比較的暗い1階北東側やB1階にアトムビジョンやアニメ工房と管理スペースが並ぶ空間配置は、上記の敷地環境の特性と合致した合理的な配置となっている。

図2 手塚治虫記念館 周辺図

図3 手塚治虫記念館平面図およびM型トラッキング図

以上から12BM型が、敷地環境の条件に適合した巡回形式であることに加え、館の期待する観覧順路と合致していることがわかる。

一方、12BM型が33件ある一方で、同型をとらない動線は20件存在する。中でも調査で採った全53件のうち7件の10才以下の子供や、子供連れの組では、その内5件が12BM型とは異なり、のべ5回以上のフロア間移動を伴う忙しい動線となっている（表4）。さらに同じ7件のうち5件の動線を調査員のインタビューで分析すると「1Fはほとんど見ずに、2Fの手塚治虫ライブラリーでゲームするところに直行」ないし、親が子供たち3人をブリクラコーナに連れていくなど、展示よりも体験や学習スペースを中心にして観覧していた。また、外国人と分かった全53件中4件のうち3件が展示を見ない、もしくは逆順路で見るなど例外的な動きをしていた。つまり、体験型のアトラクションに興味をもちやすい子供や、同館が期待するような手塚の位置づけを読み解くことが日本人よりは一般的に困難な外国人は、同館が期待する動きから逸脱しやすいといえる。同館をM型の行動で楽しむには、手塚治虫に対する予備知識が必要であり、こうした条件の存在は、夏休み期間を挟んだ2011年8月30日から9月5日までの全チケット購入者1253人中（無料者含）に、学生以下の割合が6%を下回っていた点にも現れていると考えられる¹⁰⁾。

以上より手塚治虫記念館は、手塚治虫という人を学ぶための巡回形式が、敷地環境に応じた空間構成となって合理的に配置され、そこを手塚治虫ないし手塚マンガを実際読み知っている人が、M型の行動で観覧することを促進する施設となっている。

4. 図書館という建築類型—広島市まんが図書館

4.1 概要

広島市まんが図書館は、広島市南区にある標高約70mの比治山の頂上付近にある。1979年に広島市の政令指定都市移行を記念して、比治山は芸術の森として市民文化の中心になるように企図された。そして1980年には現代美術館などを中心にした比治山芸術公園基本計画が策定され、その一環として1983年に広島市青空図書館が竣工した。同図書館が、1997年に「まんが図書館」として改装・開館した。

建物は平面が扇形の2階建てRC造で、2階に主階が置かれ、1階は事務室となっている。また館は「漫画及び漫画に関する資料を体系的に収集・保存するとともに、各種行事を開催することによって、漫画文化の発展に寄与する」ことを目的としている。来館者数は毎年23万から24万人で推移し、増加・減少は見られない。同館と同じ比治山の山頂にある広島市現代美術館の2010年の来館者が10万6000人であり、それと比較すれば倍以上の来館者をまんが図書館は集めており、マンガの高い集客力が読み解ける。また図書館であるため、手塚治虫記念館やMMとは異なり、入館料は無料である¹¹⁾。

同館は展示スペースを一部もつが、基本的な役割はマンガ本の収集、保存、貸し出しであり、建築類型は図書館である。

4.2 トラッキング調査の結果

採取したデータを第2章で示したM型、L型の観点から分類した。館内の東西両端の南壁と2階上がつてすぐの図書館カウンターゲートに入る直前に、それぞれ稀少マンガ本などが展示されているため、その展示を見る行為をM型、一方で「棚を見ながら本を選んでいる」ことや「立ち読み」、「イスに座って読書」、貸出し返却などを主目的

に来館していると判断できた場合はL型とした¹²⁾。その結果、実質滞在時間5分以下の本の返却のみの来館者もL型に含めれば、71件すべてがL型であり、展示に注意を払うM型の行動をする来館者は全くいなかった(表5)。

来館者の平均滞在時間は49分で、手塚治虫記念館、MMを合わせた3館中最も短い。さらに図4から分かるように、30分未満の滞在が最も多かった。トラッキングの情報からマンガの借出・返却をした来館者と、していない来館者の分布割合をみると、滞在時間30分をピークとして借出・返却のために訪れており、その後60分を境にしてきれいに逆転していた。

4.3 L型行動と建築空間との関係分析

以上から、マンガに高い集客力があるにも関わらず、同館における来館者の滞在時間は短いことがわかる。加えて30分前後の借出・

図4 広島市まんが図書館 滞在時間分布

表5 広島市まんが図書館 調査結果

行動類型	件数	平均滞在時間	概要
M型	0		・本棚をうろうろ、取ったり返したりを繰り返す。
L型	71	49分	・ひたすら読書。
合計	71	49分

図5 広島市まんが図書館 周辺図

図6 広島まんが図書館 2F 平面図およびL型トラッキング図

返却を目的にした来館者層と、60分前後の滞在で借出・返却を行わずに図書館内で読書をする来館者層に分かれていた。この2つの層からそれぞれ事例を抽出しトラッキング図を示したが(図6)、差異は滞在時間が増えれば本棚と本棚の間におかれたイスを往復する動線が増える程度で、同館の動線に本質的な相違点を生む要素は見えなかった。館内では、床に座り込んだり、隅に寝転がったりしてマンガを読むことは禁止されているため、読書の際はマンガを探しつつ立ったままかイスで読み、気に入れば借りて帰るか館で読むという行動しか存在しない。つまり来館者には「マンガを借りて帰るか/留まって姿勢正しく読むか」という限られた選択肢しかない。

次に、上記のような限定的な行動と建築空間の関係を考察する。同館内は、2階図書室の西側半分が書棚となっており、東側半分は受付とエレベーター、階段室、及び新聞の棚が配置されている。館の東西両端の読書スペースのほか、中央部に7~8人が座れる円形ソファや、パイプスペースの前や本棚の傍、柱の下にイスが置かれているが、調査中は慢性的に混雑し、イスの数が常に不足していた。

一方同館は、その敷地周辺でもマンガを読めるように一時貸出しサービスを行っているが、それを利用して館外で読む利用者はいなかった。この理由は一時貸出し手続きに手間がかかる点に加え、建築的な観点からも推察できる。図書室を出入りする際に通る必要のある監視センサー付きゲートや、主階が2階にあるため、地上外部空間と距離感が生じている点である。さらに外部空間にも日差しを避けるスペースや、気楽に座ったり横になったりできるベンチや芝生がない。こうした内部と外部を峻別するまんが図書館の空間的な閉鎖性からも、マンガとの向き合い方が、室内で姿勢正しく本を読むような従来型の図書館的な読み方に限定されていると考えられる。

この閉鎖性は、敷地や都市空間における館の立地からも同様に指摘できる。比治山頂上のロータリーからは、まんが図書館と広島市現代美術館にアプローチが分岐する(図5)。だがポストモダンなデザインである現代美術館と図書館との間には、内装や外装、周辺環境も含めデザインの一体感がなく、頂上付近の文化施設は相互に孤立している。加えて、市内中心部から図書館を結ぶ公共交通機関がなく、多くの利用者は車で来て目的を果たした後は、そのまま帰ってしまう。山頂の文化施設計画の中だけでなく、市中心部との関係においても、館には空間的な閉鎖性が生じている。

以上から、同館は図書館単体として多くの来館者を集めているものの、館における来館者の滞在時間は短く、その行動は「マンガを借りて帰るか/留まって姿勢正しく読むか」に限定されていることがわかった。その原因は、館内の行動の限定性に加え、館と敷地、館と都市空間との空間的な関係性にもあると考えられる。

5. 博物館と図書館の融合型—京都国際マンガミュージアム

5.1 概要

MMの建物は、京都市中京区の旧龍池小学校を転用したもので、類設計室がリノベーションを行ない、2006年に開館した。京都市と京都精華大学が同館を共同で企画・運営しており、コンセプトには、マンガ文化の調査・研究、同文化の体系的な資料収集をもとにした博物館・図書館の運営、研究者・専門家の育成、マンガ文化からの新産業の創出や生涯学習・文化の創造を掲げている¹³⁾。来館者は開館5年目で100万人を超え、現在年間20数万人で推移している。

建物は元の小学校建築の校舎2棟（Lの字に接続したそれぞれRC造の2階建北館、3階建本館）と旧講堂兼体育館（RC造）からなっており、広いグラウンド（元運動場）をもつ。リノベーションに際して、2棟の校舎と旧講堂兼体育館の間にガラスに覆われた「吹き抜け」が設置され、各建築が一体的に接続された。入口は北館の東側1階にあるミュージアムカフェ横にある。入口を入るとミュージアムショップと受付が並び、受付奥からマンガが配架されている。北館2階は企画展示室、3階は東奥に研究室、レファレンス室、会議室、地下は収蔵庫となっている。つまり北館は主にマンガ文化のためのスペースである。旧講堂兼体育館棟の1階は多目的映像ホール、2階は企画展示のメインギャラリーとなっている。本館は、1階にこども図書館や大・中会議室、小学校時のままに保存された校長室と地域集会室、2階に企画展示ギャラリーや未来マンガ研究室、紙芝居が行われる多目的研究室や、地域の人々に活用される和室の多目的研究室、龍池小学校や地域コミュニティの歴史を展示した龍池歴史記念室、そして館長室と事務室がある。つまり本館は、マンガとは直接関係をもたない龍池小学校の記憶や地域の人々のための空間と、MMの維持・管理のための空間となっている。

同館では企画展や講演会、シンポジウムが行われ、30万点にのぼるマンガ関連資料が所蔵されている。所蔵資料中5万点のマンガ単行本は、壁一面を覆い尽くす本棚「マンガの壁」に収められ、来館者はそれらを借りることはできないものの、手にとってグラウンドを含む館内の好きな所で読むことができる。またマンガ家たちが書いた舞妓のイラスト展示や、似顔絵コーナー、マンガの描き方コーナーも配置されている。

以上からMMの建築的特徴は、博物館機能の中核を担う展示室や図書館としての機能を担う書架や読書スペースが、館全体に散在していると同時に混在していること、加えて博物館や図書館以外の機能をもつ部屋もあること、外部にはグラウンドがあることといえる。

5.2 トラッキング調査結果

MMの来館者を第2章の行動類型に従い、さらにトラッキングの調査の動線と調査員のインタビュー内容を参照して、M型、L型に分類した(表6)。具体的には、「展示室内を1周。その後丁寧に特別展をみた上、「第2会場にいき、2周くらい」するような、展示を一通り見歩き、興味が湧く部分には時間を費やす見方を、代表的なM型と判断した。次に「棚からマンガを数冊とって、先ほどの席に戻る」というような書棚と廊下やエレベーター、吹き抜け横にあるイスを何度も往復するような読み方や、立ち読み座り読みに関わらず、周囲を「見ることはほとんどなく、没頭」して読む来館者をL型とした¹⁴⁾。この結果M型は22件、L型は21件であった。またM型L型双方の行動(以

表6 京都国際マンガミュージアム 調査結果

行動類型	件数	平均滞在時間	概要
M型	22	59分	・(特別展)手に取るところは結構みる。 ・マンガ家が絵を描いているところもしっかりみる ・歩みはゆっくりで、マンガの話・世間話しながら。 ・娘と一緒に隣に座って、むすめとは別のマンガを読んでいた。
L型	21	2時間26分	・長いすに寝そべって読むようになった。 ・柱の影に場所をとっている。人がきたら、すっとみえないよ
ML型	13	1時間29分	・パンフレットみながらゆっくりぐるーっとみるかんじ。棚のマンガを手にとってみる。 ・(呼び込みの)お兄さんにつれられ紙芝居部屋に。 ・外の階段がいつも定位置で、小雨が降ってきたので(中略)マンガの前でスケジュール帳をひらいて、携帯をいじっている。 ・(息子は)母の横で爆睡。母と父、マッサージしあう。
合計	68	1時間53分	

下ML型)を示す来館者も13件見られた。

M、L、ML型の行動は、博物館と図書館の融合を目指すというMMの設立趣旨と合致したものである。しかしMMの特筆すべき点は、それら以外の来館者行動が12件確認されたことである。後に述べるように、彼ら・彼女らの行動からは展示や読書を楽しみにきたとは判断しづらく、あたかも公園のように個々の目的に応じて施設を使うことから、この種の行動をP型(Park・公園型)と新たに定義した。これらM、L、ML、P型の行動を支える空間について、以下で検討する。

5.3 M、L、ML、P型行動と建築空間との関係分析

① 博物館的回遊性(M型を支える空間特性)

M型の行動類型を示した22件の来館者は、展示を見るために館内を巡回していた(図7)。博物館建築は、来館者に基点をもたせずに展示にそって広範囲に移動させることが重要であり、高い回遊性を必要とする。しかし同館は転用前は学校建築であり、回遊性を備えていなかった。そのためリノベーション時にガラスで囲んで室内化した吹き抜けの大空間を、各棟を結ぶ位置に設けることで、本館2階、北館2階、旧講堂兼体育館2階部分に分散した展示室を接続し、外部に出ずに各棟間を階毎に連続的に移動できる平面的な回遊性を確保している。加えて吹き抜け部に、館内唯一のエレベーターを設置したことで、垂直方向の連続性も高められた。こうして水平・垂直移動の中心となった吹き抜け部に、運動場やデッキテラスに出るメインゲートを設けたことで、本館と北館、旧講堂兼体育館、そして運動場というMMの主要空間が、吹き抜け部を中心に水平・垂直方向に結びつきを強めた。点在する展示空間を移動していくM型のための回遊性を、以上のようにしてMMは担保していると考えられる。

② 図書館的滞留性(L型を支える空間特性)

MMは分散配置された本棚やレファレンス室、収蔵庫がある他は、まとまった読書空間や貸出し・返却を行うコントロールデスクが存在せず、図書館建築としては不完全である。その中でL型を示した21件のMM来館者は、本棚の前で立ち読みをしたり、廊下や柱周りのイスでマンガを読んだり、階段に座り込んで読んだり、吹き抜け部分やエレベーター前の机にマンガを山積みにして読んだりしていた(図7)。またマンガをもって運動場に出て弁当を食べながら読んだり、本館1階の「こども図書館」という子供向けの部屋で、靴を脱いで寝転がりながら読んでいる人もいた。このようにMMでは、本来は読書空間として利用されることのない廊下や階段、グラウンドといった空間での読書を許すことで、まとまった読書空間の不足を補っているのである。それは、いわゆる座して読むというスタイルだけでなく、寝転がって飲食しながら読むという日常生活に近い姿勢や、建物の隅や公園でリラックスしてマンガを読むようなスタイルまで、幅広い読書スタイルを許容することで、可能になっている。

つまりMMは図書館としては不十分な空間構成だが、読むスタイルの制限を緩め、本来ならば移動のための空間である廊下や階段など、博物館としての回遊性を担保する空間を、読書のための滞留空間として幅広く許容することで、読書空間を捻出しているのである。

③ 博物館的回遊行動と図書館的滞留行動(ML型を支える空間特性)

ML型はM、L型の行動間の交替や往復を示す行動類型であり、MM

が目指す博物館と図書館の融合を体現していると考えられる。この類型では、M型の行動をしつつも、点在する展示室への移動途中で、マンガの壁に配置され目についたマンガを読み始めてL型に切り替わったりする。あるいは当初はL型であったにも関わらず、マンガ

を歩いて館内を歩き回った結果、ミュージアムの体験型イベントの呼び込みに「つられて」参加したり、展示に目をとめてそのまま見入ってM型行動へと移ったりする。こうした行動型の交替の理由の一つには、MMにおける博物館的な展示空間と図書館的な読書空間の混在が考えられる。二つめに、次のような館側の空間利用にも原因があると考えられる。北館東側の階段や本館南側の階段は、MM全体の中では端部にある階段であるにも関

図7 京都国際マンガミュージアム M、L、ML型トラッキング図

わらず、イベントや展示に応じて変則的に封鎖されてしまっていたため、袋小路が生じていた。これは一般的には非効率と考えられる来館者の引き返しの行動につながるが、その結果先のように歩き回ったり、行き止まり空間で長時間滞留したりするような行動を促していると考えられる。こうした回遊性と滞留性を支える空間が相互に貫入していることや、回遊性を裏切る館内空間の変則的な利用や構成が、ML型の行動を発現させているといえる。

④ 公園的利用行動の発生 (P型を支える空間特性)

P型は、上記分類にはおさまらない行動であり、手塚治虫記念館や広島市まんが図書館では見られなかったものである。P型を示したものは全部で12件あり、そのうち7件は子供のみにし子供を連れていた。その来館者らはマンガをほとんど読まずに走り回ったり、寝転ぶなどの行動を通して、こども図書館がグラウンドを必ず利用していた(図8 P型-3)。残りの来館5件は大人のみで構成されており、本館1階のこども図書館でヘッドフォンをつけてずっと寝転んでいる30代の男性(図8 P型-2)や、本館1階の地域会議室東側で座り込み、ぼんやりと携帯をいじり続けた後、吹き抜け内部の人目につかない階段の下にしゃがんで時間を過した20代半ばの女性(図8 P型-1)、グラウンドでマンガを片手にもちながらも会話に長時間夢中になるカップルなどがいた。これら大人のためのP型の動線の特徴は、長い時間同じ場所に留まったり、落ち着ける場所を探すような動線を描いていることである。調査員のインタビュー記録でも「マンガ図書館にくつろぎにきた感じ」あるいは「何かやりたいことはない人」、「誰にも関心を向けられない空間をさがしているような感じ」と評されていた¹⁵⁾。

以上からマンガを集中して読めず、展示を楽しめない小さな子供とその親の行動や、そうした親子の中にまじってくつろいだり、建物の隅に落ち着く場所を探したりする大人の行動を許容する空間がP型を支えていると考えられる。具体的にはグラウンドやその隅、こども図書館、他人の注意をひかない階段などがあげられる。以下これらの空間特性を、MMの建築空間の成立背景から検証する¹⁶⁾。

MMの本館は、1929年に建設され、柱や梁、窓の周辺に様式主義的な装飾が残る建築であり、南側中央に壮麗な階段がある。北館は1937年に建設されたもので、装飾が省かれ、機能主義的な建築である。先述の通り開館にあたってリノベーションした際、それまでは各校舎から自由にグラウンドに出ることができたが、付加された吹き抜け部からしか出ることができなくなり、校舎とグラウンドの結びつきが限定されることとなった。そして採光が重視された子供の教室は、カーテンや目張りがされて暗室化し、人工照明の展示室となり、移動空間であった廊下に本棚が配置されるなど、それぞれの空間がもつ特性が転換された。またもともと子供たちの安全のために両替町通り側の本館にあった入口を、人通りが多く集客力の高い鳥丸通り側の北館横に移した。この結果、本館を中心にした空間のヒエラルキーが反転し、意匠的に凝った空間を多くもつ本館が、現在の入口から見れば奥に位置することになった。

こうした建物の歴史的背景を踏まえると、MMにおけるP型行動を支えているグラウンドは、博物館建築にも図書館建築にも必要ないものであるが、子供たちにとっては日常的な遊び場としてなじみやすい、小学校時代の遺物としての空間であることがわかる。つまり

グラウンドは、M、L型の行動には一見必要のない空間であるが、M、L型の行動が基本的に難しい小さい子供向けの場所としての補完的な役割ももっているのだといえる。

こども図書館は、龍池歴史記念室を除けば転用時に暗室化されずに残った、来館者が自由に入ることのできる唯一の元教室空間である。床にはクッションがはられて寝転んでマンガや絵本を読むことができ、元教室であるため採光にも配慮が行き届いており、明るく居心地の良い空間である。その結果、子供たちやその親が長居し、マンガを読めなくてもおしゃべりに興じたり、団欒を楽し

むのに適した空間となっている。

本調査でP型行動に利用されていた階段は、小学校からの転用を契機に空間のヒエラルキーが反転したことで、性格を大きく変えた空間であった。本来は主動線として計画され、立派な意匠を持つ幅の広い本館南側の階段は、リノベーション後に管理運営スペース空間が配置された、館の一番奥に位置することとなり、最も利用頻度の低い階段となった。また中心的な空間である吹き抜け部の階段も、目立たない位置に残されたため、利用頻度が低くなった。このようにP型に利用されている階段は、リノベーションによって人目につきにくい空間となり、人目を気にせず思い思いの行動を取るのに適した空間であったのである。

このように、P型行動は、転用以降も小学校建築としての特徴を引き継いだことや、リノベーションによって空間のヒエラルキーが反転したことによって生まれた空間的な包容力によって支えられていると考えられる。

6. 結論

以上、宝塚市立手塚治虫記念館、広島市まんが図書館、京都国際マンガミュージアムを、来館者行動と建築空間の分析から議論した。

まず、手塚治虫記念館は、M型の動きを促す建築空間であり、それは敷地環境との関係や館側の展示意図と合致した合理的なものであった。一方でL型行動を生み出す可能性のあるライブラリーはあるものの、所蔵されているマンガの種類や読める場所が制限されていた。

次に広島市まんが図書館には、マンガの強い集客力が現れていたが、図書館の小さな展示スペースは全く観覧されず、読書行動も制限されており、周辺環境との接点も少ないため、来館者の行動はすべてL型行動であった。

最後にMMでは、リノベーションにより回遊性が高められ、展示空間をめぐるM型の来館者行動が支えられていた。またL型の来館者行動は、館内においてほとんど制限されておらず、多様な読書行動が見られた。さらにそうしたM型とL型を支える空間が混在・貫入しあうことで、M型とL型の間を行き来するML型の行動類型も現れていた。M型、L型に加え、一定数のML型が存在したことは、博物館と図書館の融合がなされていることを示しているといえる。

加えて、当初想定できなかったP型という行動もMMでは見られた。彼らは積極的に展示も見なければマンガも読まず、寝転がることのできる部屋やグラウンドで思い思いのことをして、あたかも公園のようにMMを利用していた。

こうしたP型行動は、一見マンガとは関係のない行動のようだが、日常生活のプライベートな行動と大差なく、飲食をしたり、寝転がったり、友人と一緒におしゃべりをしながらマンガを読むという、ポピュラーカルチャーとしてのマンガ受容行動の延長上にある。いわばP型は、マンガというポピュラーカルチャーに合致した空間を用意し、M、L、ML型行動を生み出すことができた時に、それに付随して発生する行動類型なのだ。翻っていえば、P型行動の存在は、包括的にマンガ文化を享受する空間としてマンガ文化施設が成立・機能しているかどうかの一つの指標となり得るということである。従って、今後マンガ文化施設を新たに計画する際に、マンガを見たり読んだりすることとは一見関係なさそうなP型来館者行動を排除

図8 京都国際マンガミュージアム P型トラッキング図

しない空間を、マンガ文化と整合性を保ちつつ設計することが必要であろう。

本論で扱った MM では、回遊性と滞留性のある空間や、そのアンバランスさ、またマンガ文化施設に必須ではない空間によって、P 型行動が生まれていた。他方で P 型行動が生まれていなかった手塚治虫記念館や広島市まんが図書館が、そのような空間を造っていく手立ても十分考えられる。手塚個人や手塚作品を知らない来館者のための空間や、展示や読書を楽しめない子供の受け皿となる空間が不足していた手塚治虫記念館では、手塚マンガに対する予備知識を必要としない巡回形式を積極的に用意することも一つの方向性であろう。広島市まんが図書館では、館内の読書行動が制限されており、マンガが建築空間や敷地環境、都市空間の多様な場所、多様な機会を捉えて自由に読まれることには閉鎖的な空間であった。そうした中で、例えば本の紛失や汚損の問題に配慮しながらも、図書館の周辺環境を読書空間に取り込むことが、まんが図書館にとっての新しい P 型を獲得していくことにつながるかもしれない¹⁷⁾。

本論では、マンガのもつポピュラーカルチャー性ゆえの、消費を生み出す場としてのマンガ文化施設などについては、議論できなかった¹⁸⁾。さらに近年注目をあびている、まちや通り全体をマンガ文化施設と関連させる活動なども今後考察していく予定である。

謝辞

本研究は、筆者を含め、村田麻里子（関西大学・社会学部准教授）、山中千恵（仁愛大学・人間学部准教授）、伊藤遊（京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センター・研究員）によるマンガミュージアム研究のうち、建築に焦点をあてたものである。本報告をまとめるにあたり、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年度～26 年度）の助成で推進中の関西大学社会的信頼システム創生プロジェクトの一部かつ、平成 21 年度仁愛大学学内共同研究費の成果の一部を用いた。加えて、宝塚市手塚治虫記念館、広島市まんが図書館、京都国際マンガミュージアムの関係各位の温かいご支援と、調査を手伝って下さった大学生・院生諸氏の尽力による。記して謝意を表したい。また、本論文を加筆・修正するにあたり、平成 24 年度日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究、代表：谷川竜一、課題番号 24656343）の調査研究成果も用いた。

なお、本論で論じた各館内の展示や館内利用は、いずれも調査時の状態である。

注

- 1) 例えば 2011 年に開館した川崎市 藤子・F・不二雄ミュージアムや 2012 年夏に開館した北九州市漫画ミュージアムなど続々と開館している。村田の調べでは 2009 年の時点で、全国に約 50 館のマンガミュージアムがある（表智之ほか『マンガとミュージアムが会おうとき』臨川書店、2009 年）。
- 2) 本稿では代表例として広島市まんが図書館を扱ったが、その背景に関しては右記参照。日本図書館協会現代の図書館編集委員会『現代の図書館』vol. 47 no. 4、日本図書館協会、2009 年。
- 3) 博物館、図書館の建築類型に関しては右記。新建築学大系編集委員編、栗原嘉一郎ほか『新建築学大系 30 図書館・博物館の設計』彰国社、1983 年、吉武泰美編、青木正夫ほか『建築計画学 8 学校 I』丸善、1974 年。
- 4) 村田麻里子、山中千恵、谷川竜一、伊藤遊「京都国際マンガミュージアムにおける来館者調査 ―ポピュラー文化ミュージアムに関する基礎研究―」京都精華大学紀要委員会編『京都精華大学紀要』37 号、京都精華大学、2010 年、

77～92 頁、及び、山中千恵、伊藤遊、村田麻里子、谷川竜一「人はマンガミュージアムで何をしているのか―マンガ文化施設における来館者行動と〈マンガ環境〉をめぐって」日本マンガ学会編『マンガ研究』vol. 17、日本マンガ学会、2011 年、76～85 頁。

- 5) A. W. Melton, Problems of Installation in Museums of Art, American Association of Museums, 1935。石田清一、椎名仙卓「博物館における観覧行動軌跡」『博物館研究』37(2)、日本博物館協会、1964 年、6～11 頁。
- 6) 坪山幸王、佐藤信治「展示水槽に対する来館者の観覧行動―水族館の観覧空間に関する建築計画的な研究(1)」『博物館学雑誌』Vol. 20 No. 1-2、全日本博物館学会、1995 年、10～12 頁。江waters 仁、大原一興「ミュージアムにおける民家の室内展示に対する来館者の観覧行動に関する研究―日本科学未来館・環境共生型住宅の事例―」『日本建築学会計画系論文集』第 600 号、日本建築学会、2006 年、41～48 頁。北岡敏郎、青木正夫、竹下輝和「図書館利用型の構成とその特徴 ファミリー利用からみた公共図書館のコーナー構成に関する研究(1)」『日本建築学会計画系論文集』第 498 号、日本建築学会、1997 年、117～122 頁。
- 7) 手塚治虫記念館パンフレット参照。
- 8) 宝塚手塚治虫記念館トラッキング調査時の調査員へのインタビュー資料
- 9) ただし、1994 年の手塚治虫記念館の開館時には、記念館北側の敷地では宝塚ファミリーランドがまだ運営されていた。90 年代に同ランドは来館者を減らしていったが、2001 年でも同ランドは 111 万人の来館者を迎えており、そう考えれば手塚治虫記念館北側は、現在よりは高い利用価値をもっていたと考えられる。「阪急電鉄、宝塚ランドを来春閉鎖 90 年の歴史に幕」『朝日新聞』、2002 年 4 月 10 日朝刊、11 頁。
- 10) 宝塚手塚治虫記念館からの情報提供による。
- 11) 広島市立図書館『広島市の図書館（要覧）2011 年度（平成 23 年度）』広島市未来都市創造財団中央図書館、2011 年、79 頁。「広島市現代美術館指定管理者の業務実施状況（平成 22 年度）の概要・評価」（<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/0000000000000/1316821083809/activesqr/common/other/4e7d1e2c008.pdf>）。
- 12) 広島市まんが図書館トラッキング調査時の調査員へのインタビュー資料
- 13) 京都国際マンガミュージアムウェブサイト（<http://www.kyotomm.jp/about/mm/>）、及びえむえむブログ（2010 年 8 月 24 日、<http://d.hatena.ne.jp/kyotomm/20100824/1282627294>）。
- 14) 京都国際マンガミュージアムトラッキング調査時の調査員へのインタビュー資料
- 15) 前掲 14)
- 16) 新建築学大系編集委員編、栗原嘉一郎ほか『新建築学大系 30 図書館・博物館の設計』彰国社、1983 年、297 頁。京都市内の学校建築に関する歴史的背景に関しては、川島智生「大正・昭和戦前期の京都市における鉄筋コンクリート造小学校建築の成立とその特徴について―大正 12 年から昭和 9 年までの機関」『日本建築学会計画系論文集』第 508 号、日本建築学会、1998 年、209～216 頁。
- 17) 小林郁治「マンガと図書館―まんが図書館の運営から教えられたこと」前掲 2 所収、256 頁。
- 18) 例えば 2012 年に開館した北九州市漫画ミュージアムが入るビルは、マンガを始めとしたポピュラーカルチャー関連のグッズを扱うショップが数多く入っている。

（2012 年 3 月 10 日原稿受理、2012 年 11 月 9 日採用決定）